

山形県連小会報

第175号

発行日 令和8年5月29日

発行者 山形県連合小学校長会

太田千春

山形市木の実町12-37

県教育会館(大手門パルズ)

県連小 第1回理事会開催報告

子どもと教職員の幸せを願い、挑戦し続ける県連小に

太田千春会長あいさつ



令和8年度の会長にご指名いただきました、山形市立第五小学校の太田千春です。県連小会員の一人として、その職責の重さを真摯に受け止め、県内各地区校長会の皆様と緊密に連携しながら、本県教育の発展のために精一杯努めてまいり所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

現在、私たちは急激な人口減少やDXに伴う社会構造の変化、価値観の多様化など、極めて複雑かつ困難な課題に直面しています。学校現場においては、いじめや不登校、教職員の世代交代や人員不足といった喫緊の課題に加え、ICTを有効活用した「令和の日本型学校教育」の着実な実施が求められています。

また、令和7年9月の「論点整理」に基づき、次期学習指導要領に向けて、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「持続可能性の確保」という3本柱での検討が進められています。私たちはこれらの動向を注視し、高度専門職である教師が「働きやすさ」と「働きがい」を両立できる環境整備を推進していかなければなりません。

このような激動の時代において、今年度の山形県連合小学校長会は、第7次山形県教育振興計画の目標である「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」を最重要課題として掲げます。校長自らが「時代の潮流を捉える先見性」と「不易流行を見極める見識」を磨き、子どもたちが自らの人生を舵取りすることができる「民主的で持続可能な社会の創り手」として育つよう、創意ある学校経営を共に推進してまいりましょう。

本会は、県内11地区の小学校長会から成る連合体であり、今年度、新たに47名の会員を迎え、総勢219名でのスタートとなりました。各地区がもつ特色ある伝統や文化の違いを「強み」に変え、議論を深めていくことが、各校の経営充実と本県教育の振興につながるものと確信しております。

昨年度は、「ウェルビーイング」をキーワードに、西村山地区主管による第79回研究協議会や研究紀要第69集を通じて、個人の幸せを社会全体の持続的な幸せへとつなげる学校経営の在り方について深く学び合うことができました。また、生徒指導委員会による「提言」の改訂により、不登校の未然防止と組織対応に係る課題解決に向けた具体的な取り組みを共有する一步を踏み出しました。

これらを踏まえ、本年度の重点として、以下の3つの柱を中心に活動を展開いたします。

1 研究協議会の充実と経営力の向上

第80回という節目を迎える研究協議会を軸に、校長自身の学校経営力向上を図るとともに、持続可能な研究の在り方を検討します。

2 教育環境の整備と要望活動の強化

人事・行財政・給与の各対策において、教職員定数の改善や施設設備の充実など、教育環境の整備に向けて強く働きかけてまいります。

3 指導体制の強化と迅速な情報発信

不登校やいじめ等の課題について、校長を中心とした指導体制を強化し、迅速な情報発信を行います。

今年度も、全ての子どもと教職員の幸せを願い、一人一人が自分事として挑戦し続ける組織でありたいと考えています。会員の皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。私の挨拶といたします。

新副会長あいさつ



子どもの思いに応える

荒井 孝

この度、東村山地区理事として県連小副会長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

先日、下校中の1年生が校歌を口ずさんでいる姿に出会いました。理由を尋ねたところ、「この学校が好きだから、校歌を覚えようと思って歌っていたの」と話してくれました。入学して間もない子どもが、学校に期待と憧れを抱き日々過ごしている姿に、教育の原点を改めて考えさせられました。同時に、その思いに真摯に応え、一人一人の成長を確かなものにしていくことこそ、学校経営に携わる者の責務であることを痛感しました。

今日、社会は急速かつ複雑に変化し、学校現場には容易に答えの出ない課題が山積しています。だからこそ、校長相互の連携を深め、知見を持ち寄り、率直に学び合うことが一層重要になっています。加えて、教育を支える教職員一人一人が、誇りと使命感、そして働きがいをもって力を発揮できる環境を整えていくことも、学校経営の重要な責任です。

「学校が好き」と語った子どもの純粋な思いを、一過性のものに終わらせることなく、学校に希望を抱き続けられる教育を実現していかなければなりません。そのためにも、各地区校長会との連携を一層深め、充実した研修を行いながら、子どもたちと教職員双方にとって実りある学校となるよう共に学んでいきたいと思っています。



理解と挑戦

小林 聡

今年度、山形地区理事として県連小副会長を拝命しました。どうぞよろしくお願いいたします。

生き方や価値観が多様化する現代では、自分と異なる考えや背景をもつ人と共に生きていく力が欠かせません。大切なのは、相手を知ろうとし、理解しようとする。考えの根拠や背景、きっかけとなった出会いや経験等、深く理解しようとする事です。そして、異なる考えだからこそ、新たな気づきが生まれ、新たなものが創り出されると考えます。

また、先行きが見通しにくく、唯一の正解を求めるだけでは立ち行かない時代といわれる中、第

7次山形県教育振興計画、並びに本会のキーワードである「挑戦」が、これまで以上に大切になってくると感じています。私たち校長自らが、答えを待つのではなく、試行錯誤を繰り返しながら、学び続ける姿勢で日々過ごすことが大切だと考えています。

地域によって、学校のよさも課題も異なりますが、その違いがあるからこそ、互いに学び合うことに価値があるのだと思います。それぞれの地域で培われた実践や考えを交流し、深く理解することで、新たな発想や取り組みが生まれると期待できます。異なるからこそ、新たなものが創り出される。その思いを大切にしながら、皆様と共に挑戦する一年にしていきたいと考えています。



全ての子どもの可能性を
開花させる学校づくりを

早坂 真紀

今年度、最上地区理事として県連小副会長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

新学期が始まって間もない朝、校門前で6年生の女の子が、「今年初めて見た。とてもきれいだったから」と一輪の桜をくれました。いち早く咲いた桜に気づき、その美しさを届けてくれたその感性は、当たり前のようにめぐってくる季節の変化を感じられる心の豊かさであり、大切に育んでいきたい財産です。子どもからいただいた幸せな時間でした。

先行きが不透明な時代の中で、子どもたちがウェルビーイングを高めるには、こうしたAIにはできない豊かな感性を体感できるよう、全ての子どもが持っている可能性を引き出す質の高い教育活動の実現が求められます。

そのためにも、子どもたちを惹きつける大きな魅力をもった学校経営の土台をつくる場として、地区校長会や県連小は、大変大きな役割を果たすものと考えます。各学校の実践や様々な教育課題について校長間で情報や学びを共有し、その学校らしさを踏まえながら取り組むことで、課題が特色に変わり、それは、子どもの可能性を開花させる学校の実現にもつながることが期待されます。

質の高い教育活動の実現と県連小のさらなる発展のため、皆様と共に学びながら精一杯務めてまいりたいと思います。



ウェルビーイングを目指して チャレンジを

田 中 真由美

今年度、米沢地区理事、そして置賜地区代表として県連小副会長を務めることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、令和に入り、感染症への対応に続き、非常災害への対応、熱中症や熊出没への対応など、想定を超える課題に、試行錯誤しながら課題解決してきました。第7次山形県教育振興計画の目標である「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会を担う人」が社会を創造していくことを感じずにはられません。まさに私たち校長も、多くのチャレンジにより、ウェルビーイングを目指してきたのではないかと思います。個々の価値観が多様化し、それぞれの正義や正解があるこの時代に、それを尊重していくことは容易ではありません。だからこそ、チャレンジには勇気が必要となります。そして、その勇気のもとになるのが、仲間との学びであり協働できる仲間の存在です。各学校の仲間、各地区校長会、県連小校長会の仲間との学びや、協働できる仲間の存在が大きな力となるはずで

す。今まで、先輩校長先生方に県連小の研修や情報を、各地区校長会で各校の学校経営に結び付けていただき、学校経営へのチャレンジを支えていただきました。今年度は、微力ながらその一助となれるように努めてまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



関わり合って元気に学ぶこと 小 松 泰 弘

今年度、飽海地区理事、そして庄内地区の代表として県連小副会長を拝命いたしました。

表題とした「関わり合って元気に学ぶこと」は、子どもたち、教職員、保護者、そして地域の皆様に向けて、私が常に大切にしている言葉です。学習をはじめとする教育活動は、他者と関わり合うことで形づくられるものだと考えています。自ら課題を見付け、粘り強く学習に取り組むこと、そして他者との対話を通して学びを深めていくことは、令和の教育において重視されていることの一つです。

このことは子どもだけに当てはまるものではなく、教職員にもいえることだと考えています。教職員一人一人が組織の一員としての自覚を深め、それぞれのよさや力を発揮しながら学校経営に参画していくことの重要性は、以前からいわれていることです。

そのために校長には、学校の目指す姿や方針を明確に示すことが何より求められます。教職員一人一人のよさを尊重し、力量を高めながら学校全体の教育力を向上させていくことに、学校経営の充実感や面白さがあるのではないかと思います。

各地区校長会、そしてそれらをつなぐ県連小は、互いの実践を披歴し合い、互いの考えに学びながら研鑽を深めることのできる貴重な場です。県連小研究協議会をはじめ、会員の皆様が学び合える機会をさらに充実させられるよう、副会長として全力で努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

令和8年度 山形県連合小学校長会役員一覧

役名	地区	理 事	対 策 委 員	生徒指導委員	研 修 委 員
会長 太田 千春(山形五)	山 形	小林 聡(山形西)	沼沢 聡(山形九)	須藤 克郎(桜 田)	中村 昌彦(明 治)
副会長 小林 聡(山形西) 荒井 孝(山 辺) 早坂 真紀(新 庄) 田中真由美(米沢西部) 小松 泰弘(琢 成)	上 山	塚原 洋樹(上 山)	平賀 正和(宮 川)	三木 弥生(南)	高橋由美子(中 川)
	東村山	荒井 孝(山 辺)	大場 壮一(蔵 増)	菊地 幸二(荒 谷)	佐藤 徹哉(山 口)
	西村山	小山田 聡(谷地中部)	田代 近子(本郷東)	今田 義浩(寒河江西根)	林 敏幸(西 川)
	北村山	村田 紳(楯 岡)	尾崎 惣(大久保)	安孫子孝司(小田島)	五十嵐寛之(常 盤)
	最 上	早坂 真紀(新 庄)	阿部 美穂(鮭 川)	吉田 裕二(真室川)	伊藤 道子(真室川あきひ)
監事 佐藤美和子(長 岡) 今 将史(大 森) 清水 信子(白 岩)	米 沢	田中真由美(西 部)	木村 智子(南 部)	渡部 利絵(松 川)	後藤 潤一(塩 井)
	東置賜	濱田 芳郎(沖 郷)	梅津 幸太(犬 川)	佐藤 文明(梨 郷)	吉水 順一(宮 内)
	西置賜	竹田 安路(荒 砥)	浅井 和(致 芳)	西長 大(蚕 桑)	松田 喜弘(飯豊二)
	田 川	大川 岳二(朝陽四)	伊藤 健治(余目三)	高橋 義(渡 前)	佐藤奈保子(朝陽二)
	飽 海	小松 泰弘(琢 成)	小林 伸(黒 森)	佐々木 淳(西荒瀬)	大塚 優(八 幡)
事務局長 三好 義宏	担当理事			小山田 聡(谷地中部)	早坂 真紀(新 庄)
	幹 事	小沼裕佳理(山形七)	高橋 和久(山形三)	森山 謙一(西山形)	山科 典子(蔵王二)
		森山 謙一(西山形)	馬場 賢(みはらの丘)	會田 雄一(滝 山)	高橋 浩(山形二)

理事研修会議より

テーマ

『危機管理～自然災害・動物等被害を
想定した安全対策について』

【情報交換の視点】

自然災害や野生動物被害への対応を踏まえ、児童・職員の安全確保と学校防災の充実を図るため、「危機管理としての事前指導」を含めた「安全対策の具体的な取組と課題」について情報交換を行い、研修を深める。

【各地区の現状や課題】（一部抜粋して掲載）

（山形）（話題提供）

- ・高性能気象IoTセンサー「ソラテナPro」を市内小中学校に導入。測定不要で暑さ指数などをリアルタイムでモニターやスマホに可視化。教育活動の実施判断も含めた熱中症対策を強化。
- ・公民館やコミセン等をクーリングシェルターとして開放。登下校時に児童が安全に休憩・避難できる環境を整備。
- ・熊の頻繁な出没や豪雨等の緊急時、メール配信等に加え保護者の判断による送迎対応。地域と連携した柔軟な安全確保体制を構築。
- ・市街地で登校班を実施する学校では、送迎車の駐車スペース不足に対応。近隣の商業施設等と連携し緊急時の駐車場所を確保。

（上山）

- ・水泳授業を民間委託で実施し、学校プールは使用せず運用。回数に制限があるものの、熱中症や暑さによる火傷の心配等は無し。

（東村山）

- ・プール授業の実施が難しい日が多発。自習体制を整え、見学者対応が必要になり、人的配置に課題。

（西村山）

- ・学区内で熊の出没20件。保護者による送迎や体育館駐車場の活用を実施。対応解除の判断が難しい中、解除後に熊と遭遇する事案も発生。その後も目撃情報が続く、校長判断により休校措置を実施。熊鈴の配布や避難指導等の対策も、実際の遭遇時対応には課題あり。県環境課の専門家から「荷物を置いて静かに避難する」ことを指導。「自分の命は自分で守る力」を育てることが重要と確認。熊は、朝夕に出没しやすいが、熱中症対策では暑い昼間の下校を避ける必要があるため両立が困難。鳥獣対策に関する情報共有とマニュアルの見直しが必要。

（北村山・最上）

- ・令和8年度予算で全児童生徒への熊鈴配布を計画。ただし、学校独自で既に鈴・笛を購入している場合もあり、二重配布を避けるためアンケートで調整中。
- ・地震（震度4）後の対応について、管理職が教職員を招集し、校内外の点検を即時実施。児童の危機意識の低さを踏まえ、翌日指導を実施。
- ・危機管理マニュアルが分厚く、必要な情報にすぐアクセスしづらい課題あり。簡易版（1枚程度）の対応シート作成の必要性を検討。
- ・校庭にカモシカが出没。教職員の「可愛い」という認識が危険につながるため、野生動物＝危険という意識の徹底を指導。

（米沢）

- ・昨年度、3校のプールに野生動物の糞が混入し、授業が中止となった事例あり。
- ・校庭にカモシカや熊の足跡があっても「いつものこ

と」と慣れてしまう傾向あり。危険性の再認識と教職員研修の必要性。子ども自身が危険を判断し行動できるように。

- ・熱中症、熊、地震などについて、知識・技能を身に付ける学習機会を年間計画に組み込む取組を実施中。（東置賜）

- ・昨年度、熊が赤湯小学校周辺に出没し、3週間にわたり保護者送迎を実施。

- ・近隣の林に熊が入っていることは把握していたが、市職員が罠を確認中に負傷。市として「現場に近付くな」と指示。捕獲が困難な状況が続いた。ドローンによる熱探知で熊の位置は把握していたが、街中での捕獲は困難。学校では事前に作成していた引き渡し計画（駐車場の一方通行化、体育館での地区別整列など）が機能し、混乱を最小限に抑えた。しかし「いつまで続けるのか」という判断が非常に難しく、林の伐採後、市の判断で解除。解除後も「まだ熊がいるのに、なぜやめたのか」という保護者の声。（西置賜）

- ・市営屋内プールを活用し、スクールバス送迎付きの水泳授業を実施（暑さ対策・安全確保）。
- ・地域で強盗事件が連続発生。熊だけでなく「不審者対応」も含めた危機管理が必要に。保護者送迎期間が長期化し、外遊びの制限、教職員・支援員による見守り強化が必要に。「いつまで続けるか」の判断が難しく、最終的には教育委員会の判断で通常登校へ。学校の「徒歩登校原則」を見直し、保護者送迎を認める柔軟な運用に変更。

（田川）

- ・暑さ対策として、夏季30日間のスクールバス運行を市が実施。学校ごとに運行日を申請。危機管理マニュアルについて、「できないことをマニュアルに書くべきではない」「実行可能な内容に絞るべき」という専門家の指摘を踏まえ、簡潔で実行可能なマニュアル作成の必要性を再認識。熊の出没が続き、親子熊の片方が駆除された事例もあり。対応終了の判断基準が難しいと感じている。学校ルール（原則徒歩登校）を柔軟に変更しながら児童の安全を確保。昨年度、学校の50m以内に熊が出た場合は引き渡しを実施したが、それ以外は保護者判断。

（飽海）

- ・令和6年度豪雨災害（湯沢地区）を受け、市・町・小中学校・危機管理課が合同で情報共有会議を開始。熊対策として、熊遭遇時の行動を専門家から学ぶ授業、熊避難訓練を実施する学校もあり。他校の取組（教材・講師・連携先）を共有し、地区全体で生かす体制を整備。

◆全体として浮かび上がった共通課題

- ・「慣れ」による危機意識の低下（教職員・児童ともに）
- ・危機管理マニュアルが複雑で使いにくい問題
- ・熊出没時の「対応終了の判断」が非常に難しい
- ・保護者送迎の長期化による家庭負担
- ・子ども自身が危険を判断し行動できる力の育成が重要

